

バックアウト・ムービーズ

私をKOで打ちのめした映画

Round 5

ザジとジョゼ

「この人は、男の中の男よ」と脇に立つ夫を笑顔で見やるザジ。

その大好きな夫は映画監督、脚本家、作家のジョゼ・ジョヴァンニ。第二次大戦当時は、フランスの山中でナチスと闘った元レジスタンス闘士で、戦後は当時流行った不当裁判によって、誘拐事件に関わった罪により死刑囚となった。

パリ 14 区にあるサンテ刑務所から脱獄する過程を描く「穴」を発表して 2 年後に、映画版『穴』（ジャック・ベッケル監督 1960）が公開された。脱獄映画の金字塔のみならず、映画史上「決して超えられない一本」となった。オープニングシーンから普通じゃなかった『穴』を、私は 1980 年に京橋のフィルムセンターで観た。その後、知り合ったジョゼ監督と三度目のランデブーに待ち合わせたのは、2002 年 5 月のパリのロワイヤル・モンソー・ホテル。彼の生家の近くのホテルで「あの映画は、ほとんどが事実そのもの?」との私の問いに「すべてがまさしくそのものさ」と即答したジョゼの目は真実のみを語る男の目だった。「(主人公の) マニュはジョゼのこと」と誇らげなザジ。それは誇って当然で、彼の行動はまさしく「男の中の男」である。

脱獄する 5 人のひとり进行するローランは、実際の 5 人のひとりでジョゼの服役仲間。「ローランは、映画に出てくる裏切者に、その後何度も面会に行き助けたすごい人よ」とザジ。

11 年間、服役したジョゼの映画は普通じゃない。『冒険者たち』『ル・ジタン』『ラ・スクムーン』等、夢と理想に溢



(左から) ザジ、著者、ジョゼ

れていて、そのすごさがわからない「夢なき」「筋なき」人も多いが、ジャン・ギャバン、アラン・ドロン、リノ・ヴァンチュラ、J. P. ベルモンドなどヨーロッパのトップスターがこぞ出てきたのが彼の作品。

若き死刑囚ジョゼを釈放するために、すべてをし尽くしたお父さんに捧げた『父よ』(2001) が遺作となる。映画のラストで「すぐに会おう、父さん」とナレーションを入れたジョゼは、2004 年 4 月に 80 才で亡くなった。カンヌの町外れにある高校でのジョゼの特別講義に招いてくれたのが最後の会いだっただろうか? 会う直前、ニースの旧市街の、古本が 15 冊くらいしかない小さなフリーマーケットで、ジョゼの書いた「Mon Ami, Le Traître」をたまたま見つけてジョゼに持って行ったのは、不思議な偶然だった。

残されたザジが気になりパリに飛ぶと、ザジは住んで

いるスイスから車でやってきた。「私はジョゼの影だった。彼なくして私はないの」と言うザジと「ジョゼの自伝的作品『ギャング』をなんとか再映画化して、ジョゼに捧げよう」と、オペラ座近くの Cafe de la Paix (平和のカフェ) で話し合った。それは後年、幸いにも実現した。

アメリカのイラク侵略の時、映画監督のベルトラン・タヴェルニエらと共に反対運動をしたザジ。彼女のお父さん、おじいちゃん、ふたりのおばあちゃん、おじさんとおばさんは、アウシュビッツで殺された。ひとり生き延びたおばさんは、何も語らないし、語れない。私が、撮った収容所の写真を見たザジは、感情を揺さぶられ、自分では収容所に行くのは精神的に不可能だが、私がそれを人々に伝えようとしているのはとてもいいことだと言ってくれた。

深く愛したジョゼを失ったザジが立ち上がり、歩き始めるまではすぐだった。「影は自分を探してるのよ」というザジは傷めた足首を見せながら「こないだバイクの免許を取って転んだのよ」とニコニコ。その後もラクダに乗って砂漠の横断、アフリカのジャングル探検など、ドンドン暴れている。

『穴』は傑作だが、日本では『冒険者たち』がより一層知られている。私にとっては、リノ・ヴァンチュラ演じるキャラクターがジョゼと重なる。「あれはジョゼのお気に入りの作品よ」と、教えてくれるザジは素晴らしい人生を生きている『とても人間らしい人』である。



▲ 『ル・ジタン』(1975) の撮影中、アラン・ドロンと

(Lucky Day)